

主人公と、ヒロインの『椎名 雪（しいな しづく）』が十七歳の冬。
土曜日の十四時ごろ。

二人は今、とあるタワーマンションの最上階の一室にいる。
だが、これは主人公の意思ではない。

主人公は雪によつてここへ連れてこられ、眠られた状態である。
そこは全面ガラス張りの高級な部屋で、部屋の中央には、大きなベッドが置かれている。
主人公は、ここに寝かされているのだ。

そんな主人公は、ようやく目を覚ます。

すると、雪が覗き込むようにして、主人公を優しく見つめていた。

「優しい声で穏やかに。いたつて普通のテンションで。

『おはよ～う』ではなく『おはよ～お』と、『お』に近い響きを強調する感じで】

ああ～。おはよお～

〈主人公〉

「あれ……寝てた？ なんで……？」

主人公、状況がまるでつかめず、困惑する。

主人公と零は幼なじみで、隣の家に住んでいる。

だから、零と一緒にいる事自体は、ごく自然な事である。

だが、二人の家は、ごく普通の一軒家だ。

また、二人の知り合いにも、このような、立派な部屋に住んでいる人間はない。つまり、主人公が普通に暮らしている限り、こんな所へ来る機会はない。なのに、なぜ、自分はここに寝かされているのか。

それがまるでわからないのである。

「優しい声でにこやかに。

眠っていた主人公が可愛かつたので、思い出すだけで声が優しくなる】

うん。よく寝てたよ」
うん。よお寝てたえ」

〈主人公〉

「あれつ……？ えつ？」

S E 1　主人公がベッドから起き上がる音

【最初から最後まで流す】

対する零は、この状況について、特に不自然には感じていないようだ。

まるでここが自宅であるかのように、リラックスしている。

零がこんな様子だから、主人公はますます混乱していく。
だが、これによつて思い出した事もある。

主人公と零は今日、一緒に出掛ける予定だつた。

一緒に街の中心部へ出て、買い物をするはずだつたのだ。

……だからやつぱり、この状況はおかしい。

〔優しい声でにこやかに。〕

驚いている主人公を、至つて何事もないかのように優しく見つめている

んー？

〈主人公〉

「あの。今日つて、出かけるんじやなかつたつけ？
……で。確か、朝迎えに来てくれた。よね？」

主人公、おそるおそるたずねる。

主人公の記憶では、まず、今日は午前中に零が自宅に迎えに来てくれた。
それからそのまま一緒に駅へ向かい、電車に乗つて、中心部へ行くはずだつた。
だが主人公には、朝、零を出迎えてから先の記憶がない。

「優しい声でにこやかに。

まるで『そのつもりだつたが、主人公が寝てしまつたので中止した。

だけど、少しも気にしていない。むしろ、自分としてはこの方が良かつた
とでも言つてゐるような調子で】

うん。今日はデートする約束だよ。

ああ。今日はデートする約束やつたで。

朝迎えに行つたのは、覚えてるでしょ？」
朝迎えに行つたんは、覚えてるやろ？」

〈主人公〉

「……うん。それは覚えてるよ。でも……」

よかつた。どうやら、記憶違いではなかつたようだ。

主人公、まず、自分がおかしな事を言つてゐるわけではないとわかつて、ホツとする。
だが、これで疑問が解決したわけではない。

なぜ、自分はここに居るのか。

ここは一体、誰の家なのか。

そもそも、どうやつて自分達はここへ来たのか。

そういう根本的な事について、零はまったく触れないからである。

であるにもかかわらず、零は平然としている。

まるで今日の目的地は最初からここで、先ほどまで主人公が寝ていた事すら、予定通り
である。

あたかも、そう言つてゐるかのような……自然なふるまいなのである。

「笑つてごまかす。穏やかに、何事もなかつたかのようになんとしている」

ふふふ

ふふふ

（主人公）

「この部屋、うちじやないし、零の家でも、ないよね。

……普通に、どこ？　ここ」

主人公、そんな零が不気味に思えてきて、不安になる。
それでも彼女を信じたくて、質問を続ける。

「主人公の質問の意図はわかっている。

だが、それを無視して、この部屋の説明を始める。

まるで、二人揃つてここに来ている事は、取るに足らない事であるかのように】

ああ。この部屋ね？

ああ。この部屋な？

【ここから次の※マークまで、ゆつくりめに説明する】

お手洗いそつちで、お風呂はあつち。
お手洗いそつちで、お風呂はあつち。

【一呼吸あけてから】

洗面台は、向こう。※

洗面台は、向こう。

【嬉しそうに。『豪華な部屋に来られて嬉しいでしょう?』

』といふ感じで】

ホテルみたいでしょ。

ホテルみたいやろ。

こういうの『和モダン』つていうんだつけ。

こういうん『和モダン』つていうんやつけ。

海外の人とか、好きそうな感じだよね。

海外の人とか、好きそうな感じやんな。

【一呼吸あけてから。嬉しそうに。

『特に外の景色が素敵なんだよ』といふ感じで】

あ、そうだ。見て見て?

あ、せや。見てみて?

ここすごいんだよ。

ここすごいんやで。

壁、全部ガラス張りになつてて、私達の街、全部見渡せるの。

壁、全部ガラス張りになつててな、うちらの街、全部見渡せんねん。

『タワマンのてつべん。憧れだつて言つてたよね？』は『以前、タワー・マン・ションに住んでみたい。憧れだ、つて、言つていたでしよう？』という意味

タワマンのてつべん。憧れだつて言つてたよね？』

タワマンのてつべん。憧れやつて言うてたやんな？』

（主人公）

「まあ、それは、言つたけど……」

主人公、いよいよ不安になつてくる。

目の前にいるのは幼馴染の『椎名 霽』ではなく、同じ顔をした別人である。

そう言われた方が、よっぽど納得できるような気さえする。

今だつて、主人公は部屋の作りを聞きたかつたわけではないし、霁だつて、それをわかつてゐるはずだ。

なのに、この調子である。

これでは、会話が成り立つていない。

〈主人公〉

「言つた、けど……」

それでも主人公は、零の質問に答える。

以前、確かに主人公は『いつか、タワーマンションのような、高級住宅に住んでみたい。そこで、零と暮らしたい』と言つた。

だからもし仮に、零がその夢を叶えようとしてくれて、だからここへ連れてきたというのなら……少しは納得がいくからだ。

「少し間をあけてから。

『もちろん嬉しいよね？』という感じで。

だが、あくまで『今日はここにお泊まりしよう』であり、『（私と二人で）ここにお泊まりしよう』とは言つていない

だから、今日はここにお泊まりしよ。
やから、今日はここに泊まる。

【少し間をあけてから】

ね？　いいでしょ？
な？　ええやろ？』

しばしの沈黙。

〈主人公〉

「えーっ……と。

ちょっと、と正直よくわかんないんだけど。

……もしかしてサプライズ的な？」

主人公、零の言っている事がとうとう理解できなくなり、考える事を放棄したくなる。

だから思わず『これは零の用意したサプライズである』と、無理に自分を納得させようとした。

だが、そうする事は、限りなく不可能に近い。

なぜならここは、ただの高校生である零が『じゃあ、住もう』『じゃあ、遊びに行つてみよう』と、気軽に来られるような場所ではない。

ちょっととホテルに一泊するのとは、わけが違うからだ。

でも主人公は『この状況は、零が主人公を喜ばせたくて実行した事。つまり、善意の行動である』という事にしないと……とても受け入れられなかつたのである。

そして零は、この無理のある発想を肯定する。

まるで『ちょうどいい理由を手に入れた』とでも言うように、のつてくる。

「にこやかに。まるで、最初からサプライズ目的で連れてきたかのように。
実際は『サプライズ』という発想はなかつた。

しかし『サプライズ』というのは良い表現だ。と思つたので、合わせる】
そう。サプライズ」
せや。サプライズ」

しばしの沈黙。

主人公の顔が引きつる。

その口が『そんな事はあり得ない』と動きそうになる。
でも……主人公はそれができず、代わりに、わざと大げさに笑つた。

（主人公）

「なんだー！ そういう事だつたのかー！
びっくりしたよー。

目が覚めたら全然知らないところにいるんだもん！」

「一緒に笑う。

だが、笑つても声のテンションは少し上がる程度】

あはは。びっくりさせてごめんね』

あはは。びっくりさせてごめんな』

主人公がヘラヘラと作り笑いすると、零が微笑んだ。

主人公はこれに、どうしても安堵したくなってしまう。

だからここで『やつぱりそうだったんだ』『零つてば、とんでもない事するなあ』と思えたなら、どれだけよかつた事だろう。

でも、零の話は明らかに矛盾だらけだ。

疑念を払うには足りない。

だから、今の主人公にできる事と言えば、質問を重ね、少しでも情報を集める事くらいなのである。

〈主人公〉

「そうだよー。一体、どうやつてここまで運んだの？」

「少し嬉しそうに」

ふふ。

『『ね?』は質問ではなく同意の『ね?』』
ね?

【少し嬉しそうに質問する。

しかし、質問しておいて、答える気はまつたくない】

どうやって運んだんだと思う?」

どうやって運んだんやと思う?」

〈主人公〉

「誰かが手伝ってくれたとか?」

【少し楽しそうに、クイズを楽しむように。

しかし、仮に主人公が正解したところで『当たり』と言う気はまつたくない】

外れ!」

明るく否定されて、再び主人公の顔がひきつる。

たとえどんなに無理があつても『これはサプライズ』という事にして、それで片付けようとしたのに、それは到底不可能だつたと思ひ知らされてしまう。

確かに主人公の体重は、同年代の女子と比べても、さほど重い方ではない。

だが、特にスポーツをしているわけでもなければ、体格に恵まれているわけでもない。もちろん、車の運転もできない零が、同じ位の体重の主人公を、一人で運ぶなんて……。そんな事、まずできないうだろう。

どう考へても、協力者がいるはずだ。

（主人公）

「えっ？ ……あ、もしかして、おじさんとおばさんもここに居る感じ？」

なので主人公は、まだ『他にも誰かがいる』という前提で話してしまう。零はこれについて、すでに否定している。

なのに『せめて零の両親もここに居れば、まだ安心できる』と思つてしまつたのだ。

〔穏やかに優しい声で。〕

主人公の顔が引きつっているのは理解している。
しかし、それでも感情を乱さない」

それも外れ。

それも外れ。

誰にも手伝つてもらつてないし、ここには私しか居ないよ

誰にも手伝つてもうてへんし、ここにはうちしか居（い）いひんよ

（主人公）

「いやいやいや。マジ？」

「嘘ではないので自然に笑つている。

穏やかに、何事もなかつたかのように平然としている】

ふふふ。

〔少し間をあけてから。

普段なら零は同じ『本当だよ』という意味でも、別の表現を使う。

だが、ここはあえて『マジ』という、普段は使わない言い回しで、オウム返しをする。
ただし、あくまで自然に、普通に会話するようにな。

マジ」

しばしの沈黙。

〈主人公〉

「マジかあ……。それは、すごい、ねえ？」

【笑つてごまかす。穏やかに、何事もなかつたかのように平然としている】

「ね？ そうでしょ？ すごいでしょ」

やろ？ セやろ？ すごいやろ」

主人公の身体から、血の気が引いて行く。

なんだか、胸が詰まつて、呼吸がしづらくなつてきたような気がする。

それは恐怖を感じているからだ。

ここでは思うように行動できない。そんな不安があるからだ。

それでも、零は穏やかに微笑んでいた。

主人公はこんなに怖い思いをしているのに……まるで、さきやかないたずらに成功した子どものように、この場を楽しんでいる。

主人公は、そんな零が恐ろしい。『こんなのは零ではない』と、目の前の彼女を拒絶し

たくなる。

だが、主人公が知る限り、零は人をからかつたり、慌てふためく様子を見て喜んだりするような人間ではない。

であれば、零の発言は全て、本当の事なのだろうか？

零は本気で、主人公の冗談めいた夢を叶えるために、ここへ連れてきたというのだろうか……？

わからない。

何年もずっと一緒にいる幼なじみの事が、今の主人公には、まったくわからない。

〈主人公〉

「あー……！ そうだ。荷物ってどこにある？」

「私、スマホ見たいかも」

こうして主人公はとうとう現実逃避を始め、話題を変える。

そして、現実を受け入れられない自分に、言い訳をし始めた。

——だつて、もし零が、私の荷物や、その中に入っているスマホをすんなり手渡してくれ

れて、外と連絡が取れたら。

私が今想像している事は『状況を冷静に整理した結果』なんかじやなくて。ただの『ありえない妄想』になる。

そうなつてほしい。

そうなつてほしいと思つてゐるから、私は話を変えてみたんだ……。

と。

「あっさりと承諾する。

まるで、主人公がスマホを欲しがる事を、最初から想定していたかのように】

うん？　ああ、スマホね】

うん？　ああ、スマホな】

S E 2 雪が、ベッドの下にある主人公の鞄を取る音

【最初から最後まで流す】

「少し間をあけてから。

優しく穏やかに。少しも慌てずに、当然のようく渡す】

はい。どうぞ
はい。どうぞ

〈主人公〉

「ありがとう……」

SE3　主人公が、鞄を開ける音

【最初から最後まで流す】

主人公、ホツとして息をつく。

予想に反して、零があまりにもあっさりと荷物とスマホを渡してくれたからだ。

だから主人公は、スマホを手に取り、ホームボタンを押す。

すると、スマホはすぐに開いた。

パスコードは主人公の設定したものまま変わつてないし、その他にも特におかしなところはない。

最初はそう思つた。

だがすぐに、画面の左上に、見慣れない表示がある事に気づく。
それは……。

〈主人公〉

「……あれ？」

「主人公が青ざめているので。

すまなさそうに。電波が届かない件について触れる。

まるで、電波の件は、自分には責任がないかのように】

ごめん。ここ電波弱いんだ。

ああごめん。ここ電波悪くてな。

スマホ使えないの。ごめんね】

スマホ使えへんねん。ごめんな】

〈主人公〉

「あー……。 そうなんだ」

——何それ？ そんな事つてある？

タワマン最上階なんていう『この街で一番高くて一番いい所』って感じの場所に居て、
電波が入らないなんて、ありえる？

ここ、何。絶対おかしい。絶対おかしいよ……。

主人公の指先が、恐怖で冷えていく。

呼吸が、ますます苦しくなつてくる。

身体に備わった本能のようなものが、

『これ以上ここに居てはいけない』

『今すぐにでもこの部屋から出て、どうにかして、誰かと連絡を取らねばならない』
と、全身に訴えかけてくる。

でもそれは、零を疑うという事だ。

今の主人公は『理由はわからないが、零が自分をここに拉致して、閉じ込めようとしている』と考えている。

そんな中、外に出ようとする事。

それは『自分は零を危険視している』と認め、それから『自分は零と離れたいと思つている』と、零に知らせるという事だ。

そんな事ができるだろうか。

いや『できるかどうか』じゃない。

主人公は『したくない』と思つてゐる。

でも……。

〈主人公〉

「……えつ。じゃあ、一回外出てこようかな。
建物の外なら、きっとスマホ使えるよね？」

主人公は耐えられなかつた。

『どうにかして家族や友達と連絡を取つて、安心したい』という思いを、何よりも優先
してしまつたのである。

だがやはり、これはいけなかつた。

その途端、零の表情から温度が消え、その声音も、どこか淒みを増していく。

【優しく、だがはつきりと】

ううん。ダメ

あかん。ダメ

〈主人公〉

「えつ？」

「【優しく穏やかに】

外に出るのは、ダメ。
外に出んのは、ダメ。

『主人公は、一般的な女子高生程度にはスマホに依存している』『たとえそうではなくても、この状況は、多くの人にとつて不安を感じるものである』という事を、わかつていて言つてゐる』

スマホなんて使えなくていいじゃない。

スマホなんか使えんくともいいやん。

【少し間をあけてから。

やはり『『私と二人で』ここに居よう』とは言わない】

今日はここに居よう。

今日はここに居（お）ろう。

【優しく穏やかに、だが、はつきりと念を押す】

ね？』

な？』

〈主人公〉

「えつ……」

しばしの沈黙。

主人公、零の言葉が受け入れられず、かと言つて反論もできず、とうとう声が出せなくなつてしまつた。

【少し間をあけてから。

しつと話題を変える】

それより、そのお守り、まだ持つてくれてるんだね。んなことより、そのお守り、まだ持つてくれたんや。

さつき、鞄の中にあるの、ちらつと見えた。

さつきな、鞄の中にあるの、ちらつと見えたで。

【はにかむように笑う。本当に嬉しい】

嬉しい

嬉しいわあ

しかし今度は、零が話題を変える番だつた。

急に、鞄の中身の話をし始める。

えつ……。

零つてば、何、この期に及んで、お守りの話なんて始めるんだろう。
もしかして、話を逸らせそしたら、何でもいいって思ってるのかな……。

主人公はその唐突さに戸惑うが、今、零が言つた事自体は間違いではない。
今話題になつたお守りは、確かに、二人の思い出の品だつた。

また、二人の絆を象徴するものもある。

遠い昔、零が『何かあつた時に主人公を守ってくれるものだから、肌身離さず持つてい
て欲しい』と言つたものなのである。

△主人公△

「あー……これね。そりやそうだよ。大切なものだもん。
あの時も『いつも持つて』って言われたし」

言いながら、主人公は思い出していく。

そうだ。そういえば、過去にもこんな事があつた。

過去にも主人公は、零に連れられ、しばらく一緒に、狭く小さな部屋で過ごした。

それは今いるような高級な場所ではない。

だが、状況そのものはよく似ているように思える。

あの時も主人公は、何が何だかよくわからなかつた。

だが、零の言う通りにしているうちに時間は過ぎ、最終的には、何事もなく帰宅できた。であれば『今回もそうなるだろう』と思いたいところだが……。

あの時自分達は、まだ子どもだつた。

だから、当時の零に多少突飛な事をされても、現在高校生の主人公は『あの頃はお互い子どもだつたし、子どものする事って、特に理由とか意味がない事もあるよね』と納得する事ができる。

でも、今はどうだろう？

零は高校生になつてもなお、あのような遊びに、主人公を誘つているのだろうか？

「少し誇らしげに。

『ゆつた』は『言つた』という意味。だが、『い』よりも『ゆ』と聞こえるようにな

そう。あげた時『いつでも持つててね』ってゆつた。

そう。あげた時『いつでも持つててな』ってゆつた。

【はにかむように笑う。本当に嬉しい】

守つてくれて嬉しい
守つてくれて嬉しい』

△主人公△

「そつか……。それは、よかつた』

主人公、さらに零の事がわからなくなる。

だが、さつき一瞬怖い顔になつた零が、元通り笑顔になつた事に安心し、そのまま彼女のペースに乗せられてしまう。

【ふと思い出したように。また唐突に話題を変える】

そうだ。お腹空かない？もうお昼ご飯の時間だよ。

そうや。お腹空かへん？もうお昼の時間やし。

私ね、お弁当作つてきたんだ

うちな、お弁当作つてきてん』

S E 4 零がお弁当箱を取り出す音

【最初から最後まで流す】

SE5 雪がお弁当箱を開ける音

【最初から最後まで流す】

「はい。あーん」

「ほら。あーん」

〈主人公〉

「えつ……？　あ、あーん……」

主人公、この、脈絡のなさすぎする展開についていけないまま、素直に従う。箸に挟んだ卵焼きを差し出され、促されるまま、口を開けて食べる形になる。

「少し嬉しそうに。

『自分は主人公について詳しい』という事をアピールできて自慢げ】

好きでしょ？　卵焼き】

好きやんな？　卵焼き】

〈主人公〉

「好き。だけど……」

すると、口いっぱいに、卵焼きの優しい味わいが広がっていく。

それとともに、主人公はこの状況を、不可解に感じる。

主人公は先ほどまで『零は主人公をごまかすために、いくらでも時間を稼ぐつもりなのだろう』『つまり、時間そのものはいくらでもあるのではないか』と考えていた。

だが今、零は、突然急ぎだしたように思える。

まるで、今すぐにでも食べさせておかないと、次の機会はないかのようだ……。

主人公は思う。

そうだとしたら、私には今、零を疑うよりも、もつとすべき事があるんじやないだろうか。

零の事がわからなくて、怖いからって、このままヘラヘラ合わせてないで。

零の目的や、これからしようと思つてゐる事を尋ねる。

それで、その結果次第ではあるけれど……もし可能なら、零に協力する。

それが、友達として、私がすべき事なんじやないか……？

と。

それは余計な考え方かもしれない。

それどころか、この状況を、より悪くするだけかもしれない。
だけど主人公は、このままではいられなかつた。

もし零が、何か大変な問題を抱えているなら……。

何も気づかないふりをして、流されているだけなんて、おかしいと思つたのだ。

だから主人公は、意を決して口を開く。

〈主人公〉

「好きだけど……。あの……」

「優しい声で。

主人公がこの状況を不自然に感じていて、知らないふりをしている
うん？」

ん？」

しばしの沈黙。

零は静かに、主人公を見つめてくる。

先ほどと何も変わらない様子で、優しく目を細める。
まるで『おかしな事など何もないのだから、このまま従え』と、プレッシャーをかけて
きているかのようだ。

主人公はこれにひるむが、それでも尋ねた。

〈主人公〉

「やつぱり変だよ、零……。

一体何があつたの？ 私達、友達でしょ。良かつたら話してほしい」

長めの沈黙。

主人公がこれに不安を感じ始めた頃、零がようやく口を開く。

「もう少し誤魔化し続けようとしたが、やめる。

それでも、あくまで自然に笑う。

そして、この状況がどこかおかしい事を、あっさり認める

あは。

【少し間をあけてから】

やつぱり色々納得いかない感じだね』

やつぱ色々納得いかへん感じやな』

△主人公△

「そりや、そうだよ。だつて……！」

〔優しい声で。〕

だが、主人公の質問そのものは遮るように

あのね？」

あんな？」

主人公がその根拠を述べようとすると、雲が、さえぎるように口を開いた。
それはいつもの雲ではないようで、やはり恐ろしかった。

だが、もう主人公を煙に巻いたり、誤魔化して時間を稼いだりしようとすると、様子はなかつた。

〈主人公〉

「……うん」

だから主人公は素直に領き、零の言葉を待つ。
すると、思わぬ事実が告げられる。

膠着していたこの状況は、一気に動き出していく。

「優しい声で。

『ちよつとコンビニ行つてくるね』とでも言うような気軽さで】

急にごめんだけど、私ね。

急で悪いんやけど、うちな。

実はこれからすぐ、遠い所へ行かなきやならないの

実はこれからすぐ、遠いとこ行かなあかんねん」

〈主人公〉

「えっ!? 遠いところって?」

主人公、驚き、突然の展開に、深いショックを受ける。
だが、同時に納得もする。

雪がこんな事をした『理由らしい理由』が、ようやく見つかった。
そんな気がしたからだ。

だが、それがあまりにも急で、残念な理由であるのには変わらない。
果然とする主人公に、雪は続ける。

「【質問には答えない】

そう。遠い所。
そう。遠い所。

【静かに、かみしめるように】

だから、どうしても一緒に居たかったんだ。
そやから、どうしても一緒に居たかったん。

【優しく、そつと謝る】

無理に連れてきて、びっくりさせてごめんね」

無理に連れてきて、びっくりさせてごめんな」

「主人公」

「いいよ、そんな事。

それより『遠いとこ』ってどのくらい遠いの？　また会える？」

主人公、これまで零に恐怖を感じていた事すら忘れ『遠いとこ』について質問を続ける。自分でも不思議だ。

先ほどまでの自分は、あれほど零を怖がって、自分から離れようとしてすらいた。なのに、今は離れ離れになる事を、こんなにも惜しんでいるなんて。

……でも、零が怖くて、離れたいと思つたのも。

零が去っていくのが残念で、その件について尋ねたがるのも。

本当は同じ理由なのかもしれない。主人公は零が大切なのだ。
だから別人のような姿を見たら『偽者だ』と思いたくなつたし、離れていくと聞いたら、素直にそれを悲しいと思うのだ。

零も、同じように思つてくれていたらしいのだが……。

「大変さを感じさせない口調で。

まるで『コンビニに目的のものが売つていなかつたら、見つかるまで別の店へ行く。な
ので、思つたよりも時間がかかるかもしれない』とでも言うように】

んー……。わかんない。うまく行けば、すぐに戻れるかも。

んー……。分からへん。うまいこと行つたら、すぐ戻れるかも。

【優しく、そつとお願ひする】

だからね？ お願いがあるの」「
やからな？ お願いがあるねん」

だが、緊迫する主人公をよそに、零は、どこかのんびりした様子だ。

まるで『こうなる』事に、慣れ切つているようでもある。

そんな零に、主人公は慌てて返事をする。

今意思表示をしておかないと、自分の気持ちは伝わないまま終わる気がする。
そう思つたからだ。

〔主人公〕

「いいよ。何でも、いくつでも聞くよ！」

「嬉しくて、くすくす笑いながら話す」

えー？ 何でも、いくつでもお願ひ聞いてくれるの？」
えー？ 何でも、いくつでもお願ひ聞いてくれるん？」

△主人公△

「そうだよ。何でも言つて！」

こうして主人公が大きく頷くと、零が笑つた。

それは困つているような、泣きそうにも見えるような、これまでにも、何度も見た笑顔だ。

だから主人公は『いつもの零がここにいる』と思えて、呼吸が楽になる気がした。

今なら、先ほどまでは怖くてできなかつた事も容易にできる。だから、何でも言つてほしいと思つた。

S E 6 零がお弁当箱を脇のテーブルに置く音

【最初から最後まで流す】

「少し間をあけてから」

じゃあ。ぎゅーって、してくれる?」
なら。ぎゅーって、して?」

そんな主人公に、零はゆっくりと目を細める。

それからお弁当箱をベッド脇のテーブルに置き、静かに両手を広げて、こう言つた。

〈主人公〉

「……? わかった」

つまりそれは『抱きしめてほしい』という事か。

それ位の事なら、今までに何度もしている。

だから、もつと大変な事でも、まったくかまわないのだが……。

そうは思いつつも、主人公には、断る理由もない。

言われた通り両手を広げ、ベッドに座つたまま、零を抱きしめた。

S E 7 主人公と零が抱き合う音
【最初から最後まで流す】

「息遣いのみで表現する。

安心したように、大きく息を吸って、吐く

ん……

（主人公）

「……？」

そのまま、ゆっくりと時間が過ぎる。

零は何も言わずにいる。

主人公はそれが、なんだかもつたいないような気がしてならない。
だから主人公が『こんな事でいいの？』と訊こうとすると……。
そつと、零が口を開いた。

〔意を決して話し出すが、あまりテンションの違いはわからない。
ここから次の※マークまで、全体的にゆっくりと、かみしめるように話す〕
あのね。
なあ。

【少し間をあけてから】

私。あなたがこうしてくれる時。
うち。あなたが、こうしてくる時。
いつも安心できた……。
いつも安心できてん……。

【少し間をあけてから】

きっと『訳わかんない』って思うと思うけど。
たぶん『訳わからん』って思うやろうけど。
何でもできる気がしたの』※
何でもできる気がしてん』※

（主人公）

「マジ？」

主人公、零の言葉に驚く。

確かに自分は、零の一番の友達のつもりだ。

だが、この程度の事で、そんなにも零の力になれているとは知らなかつた。
それは喜ばしい事だが、何だかとても恥ずかしくもある。

だから主人公は思わず照れてしまい、それ以上の事が言えなくなってしまった。

「少し間をあけてから。

照れ笑いして。

先ほど同様、あえて『マジ』という、普段は使わない言い回しで、オウム返しをするマジ。

【少し間をあけてから。

『もう少しだけ、お願い』は、『もう少しだけこのまま抱きしめていて』という意味】
だから……もう少しだけ、お願い
やから……もう少しだけ、頼む】

（主人公）

「いいよ。……ていうかさあ」

ここで主人公は、もう一つ思い出した。

前にも、これと同じ事があつた。

それは例の『お守り』を受け取った時の出来事である。

「優しく続きを促す」

「うん？」

（主人公）

「前にも、こんな事があつたよね？」

話してゐるうちに、ちよつと思ひ出してきたよ」

「主人公がようやく思い出した事が嬉しい。

『そう。その事。やつと思い出してくれたんだ』という感じで】

あー。

あー。

ふふ。思い出してくれた？　お守りあげた時の事。

ふふ。思い出してくれたん？　お守りあげた時の事。

〔少し間をあけてから〕

そうだよ。あの時も今みたいに付き合ってくれて、約束守ってくれたよね。

そうやな。あの時も今みたいに付き合ってくれて、約束守ってくれたやんな。

〔少し間をあけてから〕

嬉しかったんだよ。
嬉しかったんやで。

【少し間をあけてから】

ぼそっと。小さめの声で。

『自分との約束を守ったから、当時主人公は無事で済んだ』という意味で言っている
だからあの時は大丈夫だつた』
せやからあの時は大丈夫やつた』

〈主人公〉

「え？」

零が何か言つたような気がするが、主人公には聞き取れなかつた。
だから聞き返したが、零が繰り返す事はなかつた。

【何事もなかつたかのように自然に】

何でもない。

何（なん）もない。

【少し間をあけてから】

あのね
あんな

〈主人公〉

「うん？」

続きを促すと、零の身体が主人公から離れた。

二人は向き合う形になり、正面から、零がこちらを見つめてくる。

それは可愛いとか、綺麗だとか、様々な明るい表現のできる顔だったが……主人公は何よりも先に、この顔そのものが、また、持ち主である零自身が好きだと思つた。

だから、たとえある日突然、それらの表現が奪われ、零の姿形がまるで違うものになつてしまつたとしても……。

自分はきっと、同じ感想を抱くだろう。

その内側にあるのがこれまで通りの零なら、自分の気持ちはきっと変わらないだろう。
そう思つた。

「【ここから次の※マークまで、穏やかに、一言一言ゆっくりと話す。
だが、はつきりと伝える】

好き。

私、あなたの事大好き。

私な、あんたの事大好きや。

ずっと好きだつたし……これからもずっと好き。

ずっと好きやつたし……これからもな、ずっと好き。

【少し間をあけてから】

だから……私の事信じてくれるなら……ここで待つててほしい」 ※
やから……私の事信じてくれんなら……ここで待つててくれへん」 ※

〈主人公〉

「え？」

その時聞き返したのは、聞き取れなかつたからではない。

それが別れの挨拶だと気づき、認めたくない気持ちがそうさせたのだ。

だが、そんな主人公をよそに、零はどこか晴れやかだ。
そのまま顔を近づけて、そして――。

〔左頬にキスする〕

ちゅつ

驚いて呆然とする主人公に、零がさらに近づく。
そのまま顔のすぐ脇まで来て、主人公の左耳にささやく。

「左耳にささやく。

優しく穏やかに、だがはつきりと】

絶対ここに居てね】

絶対ここにいてな】

〈主人公〉

「……」

そして、主人公が言葉を返す前に、零は立ち上がる。
そのままよどみなく、この部屋を去る準備を始める。

SE8 零が立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

「声は静かなままだが、心情的には晴れやか。
ほんの少しだけ声が明るくなる」

じゃあ、また後でね
んな、また後で」

SE9 雪の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかり、そのままフェードアウトする】

主人公はそれを、呆然と見つめている。

時間にして、十分程度。

でもそれが、二人の、最後になるかもしれない時間だった。

ここでフェードアウトして終了。

02・バッドエンド 「選択：外へ出る」

『01・共通ルート』から三日後。

冬のある日、十八時ごろ。

主人公、マンションから数キロほど歩いたところを、一人ふらついている。

零が姿を消してから数日。

とうとう零の不在に耐え切れなくなつた主人公は、彼女の言いつけを破つて、マンションの外へと出でしまつた。

とはいつても『あの部屋では生活するのが困難で、やむを得なかつた』というわけではない。

食事は冷蔵庫の中にいくらでも用意されていたし、水も、電気も、ガスも通常通り通つていた。

また、それらはすべて主人公が自由に使えるようになつており、主人公は『外に出られない事』『外界と連絡が取れず、情報も集められない事』以外は、普段と何も変わらない生活ができたのだ。

だが、主人公にはこれが耐えられなかつた。

外で何が起きているかわからない事、そして、そんな中零が出て行つた事が、とてもつらかったのだ。

だから主人公は約束を破り、零との関係が悪化する事よりも、思うまま行動する道を選んだ。

零を信じる事よりも、『不安でじつとしているから』という、己の感情を優先してしまったのだ。

だが、『不安でじつとしているから』結果、主人公が目にしたものは、想像を絶していた。

三十分も歩く頃には、零が『部屋から出るな』と言った理由も、骨身に染みてわかつてくる。

今からでもマンションに戻るべきだろうか。おそらくそれが正しいのだろう。
だが、もう遅い気がする。

今になつて零の真意を理解したところで、すべてはもう、手遅れに思えた。

なぜなら……。

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0—5秒ほど流してSE2】

【その後、小さな音量でトランク終了まで流し続ける】

SE2 雪の足音01

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【穏やかに。これまで通りの調子で。

『帰宅したが、主人公がリビングに居なかつたので探した。すると、自室にいた』
というくらいの様子で】

ああ。ここに居たんだね』

ん、ああ。ここに居たん』

するとそこへ、背後から雪が声をかけてきた。

主人公はその声を聞いた瞬間『姿を消す前と、何も変わっていない』と思つた。

優しい声音にむしろ安心し、自分が約束を破つた事も忘れて、再会の喜びに涙ぐんだ。

〈主人公〉

「雪……！」

だが、期待を持つて振り向いた時、それは間違いであつた事を理解する。

雪はこれまで通り、静かな雰囲気をたたえていた。

だがそこには、冷たい怒りが滲んでいるように見える。

「穏やかに。これまで通りの調子で。

『リビングから自室に移動するなら、リビングの電気は消しておいてほしい』
と、たしなめるくらいの様子で】

言つたよね。部屋の中に居てつて。

言つたやんな。部屋ん中に居てつて。

【『主人公が節電に協力しないから、電気代が上がつちやつたつて、この前説明したでしょ
う』とでも言うような調子で】

もうわかると思うけど。この世界、もうダメなの。
もう分かる思うけど。この世界、もうダメやねん。

【『二人暮らしなんだから、お互に気を付けて、光熱費を節約しようよ』

とでも言うような調子で】

私とあなたしか居ないの。

うちとあんたしか居らん。

【『でも節電の件は、あんまりしつこく言うと嫌だろうから、言わないようにしてたのに』
とでも言うような調子で】

でも、そうなつたら、あなたは嫌だろうって思つたから。
けど、そうなると、あんた嫌やろ思うたから。

【『私だけが気を付けてるって、何だか変じやない?』

とでも言うように、少しずねるように、ほんの少しだけ怒つて】

私は、何とかしたいつて思つて。

うち、何とかせな思つて。

【ここでトーンが変わる。

『すごく残念だ』という感じで】

今回も……】

今回も……】

しばしの沈黙。

「トーンが先ほどまでに戻る。『少しがつかりしている』程度の声音で。

『もうこれ以上、節電の件で怒りたくないよ』とでも言うような感じで】
なのに……何で外出たの？

やのに……何で外でたん？

何で私の事、信じてくれなかつたの？」

なんでうちの事、信じてくれへんかつたん？」

しばしの沈黙。

主人公は、言葉を発する事すらできずにいる。

「【ぼそっと。さほど怒つていなかのように。

『なんで何回言つても忘れちゃうかなあ』程度の怒りしかなかないかのように】

悪い脚。

【『こうなつたら、今度電気消し忘れたら、罰金とかにしようか』

という位の提案をしているかのよう】

こうなつたら、もう二度と、外に出たいなんて思わないようにしないとね。

こおなつたら、もう二度と、外出たいなんて思わんようにしないとあかんな。

『私一人で家計の事気を付けてるの、疲れちやつた。

そもそも節約頑張つてゐるの、二人で旅行に行くためじやん。

別に私は、お金たまらなくて、旅行行けなくなつてもそれでいいけど?』

くらいの落胆

私も、もう頑張るの疲れちやつた。

私も、もう頑張るん疲れたわ。

私達二人で暮らすだけだつたら、あれもこれも、殺す必要ないし。

うちら二人で暮らすんやつたら、あれもこれも、殺す必要ないし。

このままでも、私はそれでいいよ』

このままでも、うちそれでいいで』

△主人公△

「……零。ごめん。私が間違つてた。

全部私がいけなかつた。お願ひ。謝るから。だから……」

主人公達以外のすべての生き物が消えうせた街で、悲痛な謝罪の声が聞こえる。もはやそれを聞く者はいないが、もしいたとしたら、とても二人の関係を『友人』だと

は思わないだろう。

主人公の声は震え、怯え、今にも泣きだしそうだ。

これ以上の醜態をさらすのも、もはや時間の問題だろう。

主人公はただただ、零が恐ろしかった。

傷だらけで、血まみれで。無感情な目で自分を見下ろす零が。

そんな彼女が次に狙うのは、自分に違いない。

そう思い込んでしまうほど、今の零は恐ろしかったのである。

「主人公の言葉を完全に無視して。

ここから最後のセリフまでトーンが変わる。まずは※マークまでゆつくりと、『すぐく
残念だ』という感じで】

だつて怖いもん。
だつて怖いもん。

世界が元に戻つたら、あなたが他の子の所へ行きそうで。
世界が元に戻つたら、あんた他の子んとこ行きそうで。

だつて嘘つきだもん。あなた。
やつて嘘つきやもん。あんた。
浮氣されたら嫌だよ。私」※

浮氣された嫌やで。私

SE3 霽の足音02

【最初から最後まで流す】

【さらにだんだん近づいてくる】

だが、先に『怖い』と口にしたのは霁の方だった。
一体、今更何を恐れるというのだろう。

これだけ主人公を肉体的にも精神的にも支配して、どこに恐怖があるのだろう。
主人公はそう思つたが……。

霁はただ静かに主人公に近づき、また、左耳にささやいた。

「次の※マークまで、すべて『左耳にささやく』。
また、一言一言、ゆつくりめに、はつきり話す」

だから。

やから。

帰ろう。

帰ろ。

【ひとりわゆつくりと】

ずっと。

ずっと。

【少し間をあけてから】

二人で。あの部屋に居よう。

二人で。あの部屋に居ろう。

【特に静かに、はつきりと念を押す】

ね？」

な？」

〈主人公〉

「……はは。はは。あはは……」

すぐそばに零の吐息を感じながら、主人公は無感動に笑い、ぼんやりと空を見上げる。

『多分、自分が外へ出て、直接外の景色を見るのはこれが最後だろう』

そう思ったからだ。

だが、冬の空はすでに暗い。おまけにこの惨状だ。外には灯りすらまばらである。
だから、目を凝らしても……。

もう、ほとんど何も見えなかつた。
ここでフェードアウトして終了。